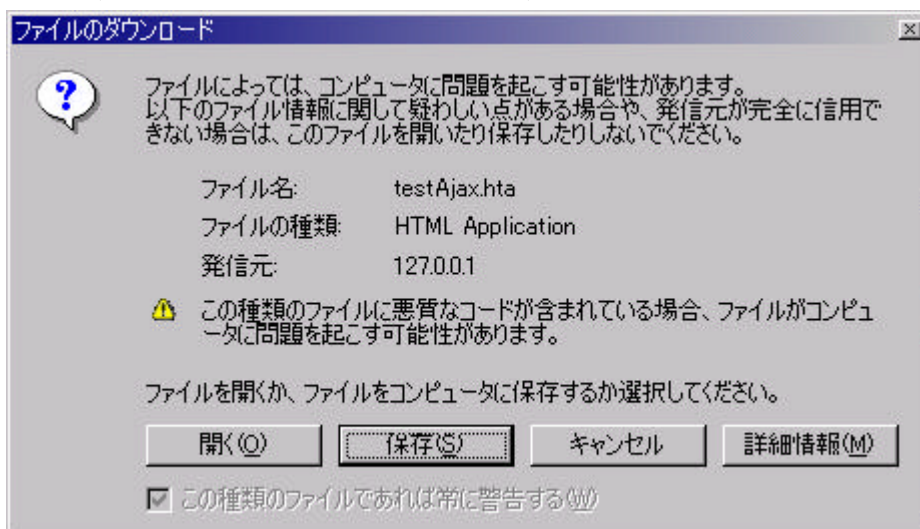


## execHTA 説明

execHTA とは、HTTP サーバから hta(HTML Application)を起動時に、取得して、実行するためのプログラムです。HTA とはブラウザなし(単体)で動く DHTML アプリケーションのことで、通常の HTML ではセキュリティの面で利用できないもの(Ajax でクロスドメインできないとか、ローカルファイル I/O ができないとか・・・)が利用できるので、Web アプリケーション開発者なら、容易にローカルアプリケーションとして、作成することができます。

ただ、HTA はローカルで動作させるのが普通で、たとえば、下記のように HTA 拡張子のファイルを、IE から直接起動させた場合など、以下のような警告が出てしまい、



セキュリティに対して無防備！？である HTA を、ブラウザから動かすのは、あまり好ましくないものであると言えます。

そのため、通常では、HTA はローカルで利用するものとなるのですが、この場合、HTA ファイル利用者に対して、修正や、機能追加等、バージョン UP があった場合、その都度クライアントに配布するのは、非効率であるといえます。

しかし、execHTA の場合は、起動時に、起動用 HTA ファイルや、その他のファイルをローディングするので、この辺の問題はなくなります。

## 使い方

execHTA の使い方は簡単で、execHTA.ini ファイルを編集して、execHTA.exe を起動するだけです。そういうわけで、以下に execHTA.ini ファイルの説明を行います。

```
.....  
;; データローディング一覧.  
;; length に対して、ロード条件数を数値で記入.  
;; load.N(N には、1 から始まる数値)には、ロード条件を下記の CSV 形式で記述  
;; <例>  
;; load.1="出力先,接続先アドレス,接続ポート,接続パス"  
.....  
[loadInfo]  
  
;; データローディング長.  
length=2  
  
;; ロードデータ群.  
load.1="js¥htaJs-min.js,127.0.0.1,3333,/~hta/js/htaJs-min.js"  
load.2="testAjax.hta,127.0.0.1,3333,/~hta/testAjax.hta"
```

まず初めに HTA 起動に必要なファイル群を HTTP サーバから取得するための定義から説明します。といっても単純で、INI ファイル内のコメントの通りなのですが、順を追って説明します。

[loadInfo]セクションは、データローディング一覧を定義するセクションです。ここでは、[length]と、[load.N]の項目を定義することができます。

「length」定義は、HTTP サーバからダウンロードするファイル数を設定します。

「load.N」定義は、N に対して「length」分のダウンロード定義を行う必要があります。

上記では、以下のデータを指定位置にダウンロードします。

読み込み先	ダウンロード先
・ http://127.0.0.1:3333/~hta/js/htaJs-min.js	=> .¥js¥htaJs-min.js
・ http://127.0.0.1:3333/~hta/testAjax.hta	=> .¥testAjax.hta

次に、起動 HTA ファイル名を設定します。

```
.....  
;; 起動 HTA 内容.  
;; ロードされた HTA ファイルから、起動 HTA ファイル名をセット.  
.....  
[startup]  
  
exec="testAjax.hta"
```

ここでは、先ほどの[loadInfo]セクションでダウンロードしたファイルの中から起動対象の HTA ファイル名を設定します。ここでは、[.¥testAjax.hta]ファイルを起動するようにしています。

使い方説明は以上です。何か質問やバグ報告等がありましたら、以下までメールください。

maachang@gmail.com